

『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（1）.txt

【凜として】（208）『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（1）二荊 [2005年03月07日 東京朝刊]

【凜として】（208）『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（1）二荊  
[2005年03月07日 東京朝刊]

■「生き方や精神が作品に色濃く反映」 賢治と魂と魂の交流

■病人を励ました“デクノボー”

雨ニモマケズ

風ニモマケズ…

『雨ニモマケズ』といえば、宮沢賢治の代表作であるばかりでなく、おそらく日本でもっとも有名な詩のひとつだろう。

昭和六（一九三一）年十一月、三十五歳の賢治が、病床のなかでメモ帳に鉛筆で記したこの詩は、また、大きな謎を秘めており、研究者によって数々の論争が繰り返されてきた。

哲学者の谷川徹三が「明治以後の日本人のつくったあらゆる詩の中で最高の詩」と絶賛する一方で、賢治の作品のなかでは「失敗作」と断じる研究者も少なくない。

また、後半の「ミンナニデクノボートヨバレ」の「デクノボー」の解釈についても意見が分かれてきた。賢治は「法華経」の信者だったことから、菩薩の生き方をそこにみる者もいれば、理想的な人間像への賢治のあこがれととる者もいる。

そんな中で「デクノボー」のモデルが、斎藤宗次郎（そうじろう）というキリスト教伝道者ではないかという説がある。

宗次郎は、賢治と同じく現在の岩手県花巻市の禅寺に生まれ、地元の小学校教諭となる。ところが、キリスト教思想家の内村鑑三の影響を受けて、学校でキリスト教教育を行ったことが原因で、退職に追いこまれ、その後約二十年間は、新聞配達業に従事することになる。大正十年ごろから、宗次郎が十五年に鑑三の伝道を手伝うために上京するまで、当時花巻農学校教諭だった賢治と交流があったことがわかっている。

《風の日も、雨の日も、雪の日も、重い新聞紙を背負って、戸毎に配達しながら走り、十歩行っっては感謝し、さらに十歩進んでは賛美し、木の下や小川のほとりにたたずんで祈りを捧げる彼の姿は、まことに気高いとも、勇壮とも、悲壮とも形容の言葉がなかった》

《彼は常に菓子や小銭をポケットに用意して、行く行く子供たちに与え、また乞食や貧困者に恵み、病床にある者を訪れて、慰めることに努めた》

宗次郎の孫娘の夫、山本泰次郎（たいじろう）は、宗次郎の伝記『内村鑑三とひとりの弟子—斎藤宗次郎あての書簡による』（教文館、昭和五十六年）のなかで、宗次郎の新聞配達の様子をくわしく述べて、『雨ニモマケズ』の「デクノボー」の生き方につながっていると主張している。

また地元の奥州大学（現富士大学）講師などを務めた照井壮助もまた、宗次郎の死の直後、昭和四十三年一月十日夕刊の岩手日報にこんな追悼文を寄せている。

《宮沢賢治もその幼年時代から青年期にかけて齊藤先生のお姿に接しているはずである》《あの“雨ニモマケズ”の姿勢はだれに学んだものであろうか。それは生得の個性に基づく姿勢であったにしても、また彼の意識の上に浮かばなかったにしても、その態度の先蹤（せんしよう）こそ実に齊藤宗次郎先生の態度でなければならぬ》

照井は少年時代、宗次郎が経営していた新聞販売店の従業員として、宗次郎とともに新聞を配達して回り、身近に接してきただけに、ことのほか思い入れが強いのだろう。

宗次郎の孫の児玉佳興子（かよこ）（71）は、お菓子やお金を与えたという話は聞いたことはないというが「病気の人を励ましたり、雪道にとまどっている子供を抱えたり、荷車を後ろから押して感謝されたという話は聞いている」と話す。そして、やはり孫の山本黎子（れいこ）（80）、田村眞生子（まきこ）（74）らとともに「すべてがあてはまるわけではないが、この作品には祖父の生き方、精神が色濃く反映しています」と口をそろえる。

■□■

記録魔でもあった宗次郎は、二万百ページ余、全四十巻に及ぶ『二荊（けい）自叙伝』を残している。二荊とは荊（いばら）の冠をつけて十字架にかかったキリストに続くという意味がこめられているという。

その自叙伝の一部がまもなく岩波書店から出版されるが、賢治の名前が何度も登場する。

宗次郎は、賢治の勤めていた花巻農学校に配達や集金に行つては、賢治とお茶を飲みながら、芸術論などをかわしたという。

また、二人とも音楽好きで特にベートーベンの偉大さについては時を忘れて語り合い、賢治が中心になって開いたレコードコンサートに招かれたという記述もあった。

今回の出版に当たって、解説文を寄せた実践女子大学教授の栗原敦は、賢治研究の一環として、宗次郎の娘だった生前の多祈（たき）に会うなど宗次郎についても調査を積み重ねてきた。その結果、宗次郎が『雨ニモマケズ』のモデルとなったとの説を取ることはないが、賢治との関係については「高い魂と魂の交流があった」という。

■□■

一方、やはり解説文を寄せた国際日本文化研究センター所長で宗教学、思想史が専門の山折哲雄も、『デクノボーになりたいたい—私の宮沢賢治』（小学館）の著書があるなど、長年賢治に関心を寄せてきた。

山折はいう。「斎藤宗次郎一人がモデルとはいえないが、キャラクターのひとつであるのはまず間違いのないだろう。宗次郎という人のことを調べていくに従い、もう少し多面的に賢治に影響を与えたのではないかと考えるようになった」

たとえば、宗次郎は、花壇づくりなど造園術や果物の栽培法にも詳しく、トマトを花巻で最初に栽培したともいわれている。

賢治も花壇づくりに熱心だったことが知られている。賢治は、精神的なことばかりでなく、こうした実践的な農業技術もまた宗次郎から得ていたにちがいない、と山折は考えている。

＝敬称略

（佐竹一秀）

【写真説明】

晩年の賢治が農業振興のために設立した「羅須地人協会」跡に立つ、賢治の詩碑第一号。没後3年目の昭和11年に教え子をはじめ多くの人の協力によって建立された。碑面には高村光太郎の揮毫（きごう）で『雨ニモマケズ』の後半が刻まれている

花巻で宗次郎と交流があった宮沢賢治（C）林風舎

聖書を片時も離さなかった40歳代後半の宗次郎

【凜として】（２０９）『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（２）師弟 [2005年03月08日 東京朝刊]

【凜として】（２０９）『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（２）師弟  
[2005年03月08日 東京朝刊]

■「教育勅語だけでは真の教育はできぬ」内村鑑三に傾倒

斎藤宗次郎は明治十年二月二十日、岩手県花巻市の曹洞宗の東林寺に轟木東林とさだの三男として生まれる。十四歳のとき、子供のなかつたいとこの斎藤武次郎（ぶじろう）の養子となる。

宗次郎を語る上でもっとも重要な人物は、無教会主義を唱えた宗教家の内村鑑三である。宗次郎がのちに鑑三の臨終に立ち会うほどに、鑑三からもっとも信頼される弟子になるが、初めてその名前を聞いたのは、高等小学校四年のときだった。校長から、教育勅語に対して敬礼をしない不敬事件を起こした国賊だと教えられ、宗次郎は怒りにうち震えた。

岩手師範学校に進学後、宗次郎が地理に興味があることを知った友人から鑑三の著書『地理学考』を薦められた。「国賊の書いたものなど誰が読むのか」と反発したが、「国賊」の名前が目障りだからと、紙をはり付けてしぶしぶ読み進めていくうちにたちまちひき込まれていく。そして、鑑三の本を次々に読破していくなかで、しだいにその思想にひかれていく。

■□■

宗次郎は、小学校の教諭になってからも鑑三が刊行する『東京独立雑誌』を購読していた。その中で、鑑三が『今の憂世家』と題して「社会の腐敗を嘆く人はたくさんいるのに、正そうとする人は一人もいない」という趣旨の文章を書いたところ、宗次郎は「北上河畔に義人ひとりあり」と激しい抗議の手紙を送った。これが師弟の間でおびただしく行き交う最初の手紙となった。

宗次郎は、鑑三に傾倒するあまり「真に子供を教育するにはキリスト教しかない」と聖書や鑑三の著書を使つての授業を行うようになった。

校長らはただちにやめるよう命じたが、宗次郎は「教育勅語だけでは真の教育はできない」とひるまない。宗次郎の名は問題教師として岩手県中に知れ渡ることになる。

生家である禅僧の父や養父からも棄教を迫られ、宗次郎は孤立感を深めていく。追い打ちをかけるように結核を患い、健康面でも不安を抱えるようになる。

しかし、宗次郎の信仰心は衰えるどころかますます深まり、鑑三の講演旅行に同行したり、自らも辻説法をするなど布教に努めた。

日露戦争は明治三十七年に始まったが、その数年前から日本とロシアは緊張関係にあった。日本国内でも開戦か非戦かで揺れるなか、鑑三は論説欄を担当する「万朝報」などでキリスト教徒の立場から非戦論を展開した。

それに共鳴した宗次郎は、子供たちの前で「戦争に反対だから、軍事費に使われる税金を払わない、徴兵されても兵役にはつかない」と公言するようになった。

こうと思ひこんだらとことんめり込む人のようである。

■□■

師にとって、命の危険を顧みず、自分の主張を実践に移そうとする弟子ほどかわいい存在はないようにも思える。しかし、鑑三は、さすがに妻も子もある宗次郎の暴走に不安を抱いたのかもしれない。

開戦前年の三十六年十二月、宗次郎が、覚悟をしたためた手紙を鑑三に送ると、鑑三はすぐに花巻にやってきた。

鑑三は吹雪のなか花巻駅に深夜二時に到着。宗次郎はそりを用意して待っていた。

翌朝、鑑三は宗次郎とひざを交えて自分の考えを述べた。

「真理と真理の応用を混同してはいけない。家族や友人に迷惑をかけ、苦難を与えることになる。これは聖書の曲解で愛の精神のないことだ。もしどうしても実行するのであれば、だれにも相談せず、残された家族への備えをも十分にし、責任を自分一人に負うべきだ」

鑑三の必死の説得に宗次郎は最後は納得した。鑑三は、自ら非戦論を唱えながら、それに賛同して実行に移そうとしている者を説得して阻止したことになる。これは、一見矛盾しているようにみえる。鑑三はさきに述べたように第一高等中学で教育勅語の敬礼を拒否するという不敬事件で職を追われ、名古屋、熊本、大阪、京都の私立学校の英語教師を転々としながら窮乏にあえいだ経験をもつ。そんなつらい体験を宗次郎にさせたくないという気持ちだったのかもしれない。

ともかく、このときの鑑三のアドバイスは、のちに太平洋戦争中のおりにも生かされることになる。特別高等警察に呼び出された宗次郎が天皇とキリストとの比較を問われたときのことだ。この時、「これは非礼であり、また答えることの不可能な問題です。人間の議論すべきことではありません」とはぐらかして、ことなきを得たこともあった。

■□■

鑑三にはこのように、しばしば主張と行動が食い違うことがあり、師の不可解さに思い悩み去っていった弟子も少なくない。

鑑三は鑑三で、弟子が自分の本当の思いを理解してくれないことへの寂しさがあつたのかもしれない。

そんな中であつて、宗次郎は最後まで鑑三に従つた弟子の一人であり、臨終の瞬間まで傍らで看病を続けた。

鑑三は『弟子を持つ不幸』という文章を残しているが、国際日本文化研究センター所長の山折哲雄は「斎藤宗次郎を得たことによつて、最後になって鑑三は『弟子を持つ至福』を味わつたのではないか」という。

翌年、日露戦争が始まった。宗次郎は鑑三のアドバイスで結核治療に米国製の「化合酸素」吸入療法などを試し、健康を回復した。

宗次郎は重大な決意をしなければならなくなった。教師と信仰を両立できない以上、どちらかを選ばなければならない。宗次郎に迷いはなかつた。その年五月、病気を理由に退職を願い出た。

これでだれにはばかることなく信仰を貫くことができるようになった。生計を立てる手段は鑑三と相談して書店を開くことになった。

店の名前は、聖書の一節からとつた「求康堂」だった。

やがて新聞取り次ぎも行うようになり、雨の日も、風の日も、雪の日も重い新聞の束をかついで、四十キロの道程を毎日配達に走り回る宗次郎の姿があつた。

＝敬称略

（佐竹一秀）

【写真説明】

若き教師時代の宗次郎。師範学校卒業の教師は当時のエリートだった宗次郎の生家である東林寺周辺の風景

『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（2）.txt  
自宅近くにもっていた畑に内村鑑三（左から4人目）を迎えて。左隣が斎藤宗次郎

【凜として】（210）『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（3）配達 [2005年03月09日 東京朝刊]

【凜として】（210）『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（3）配達  
[2005年03月09日 東京朝刊]

■「名物買うなら花巻おこし 新聞買うなら斎藤先生」誠実な仕事ぶり徐々に評価

■キリスト教に対する迫害 影ひそめる

授業にキリスト教を持ち込んだり、非戦思想を子供たちにふき込む「問題教師」として、斎藤宗次郎は、小学校教師の職を追われ、書店と新聞配達業に転じた。

師のキリスト教思想家、内村鑑三は、宗次郎が聖書の一節からとった「求康堂」を明治三十八年に開店するのに際して、こんなアドバイスを与えた。

「キリスト教はなるべくかくすべし…『われは聖書を売る』などと考えず、普通の本屋となり、そうしてヤソ教の本も売る、というようにすべし」（『内村鑑三とひとりの弟子』）

よきキリスト教徒である前に、よき地域住民であれということだろう。しかし、宗次郎に対する花巻の人たちの冷たい視線は変わらなかった。

町を歩いていると、ののしり声とともに小石を投げつけられることがあった。

新聞配達途中には、子供たちからも「ヤソ ハゲアタマ ヤソ ハリツケ」とはやしたてられた。

明治時代の地方都市では、まだキリスト教に対する偏見が強かったのも理由のひとつだろう。

もっとも、同じ信仰を持っていた宗次郎の教師時代の親友で、宮沢賢治の小学校時代の担任だった照井真乳臣（まみち）は、人格者として慕われ、校長を務めるまでになっている。

宗次郎の側にも原因はあったというべきだろう。

宗次郎は、養父の一周忌をキリスト教式で行っただけでなく、仏教の法事、神道の祭礼などを一切やめると、親戚（しんせき）や近所の住民に一方的に通告した。一周忌に集まった人々には、もちろん酒などは一滴もふるまわれない。

町の祭礼の寄付金はことわるし、神社の社殿の改築費の割り当てにも一切応じなかった。

こんなかたくなな態度をとっていたら、町の人々から反感をもたれるのは当然だろう。

国際日本文化研究センター所長の山折哲雄も、宗次郎の生き方に共感を示しながらも「原理主義的で融通がきかず、ちょっと窮屈な人」と評する。

■□■

宗次郎の苦難は続いた。養父から受け継いだ家屋敷の財産は、養母と関係のできた消防手の男にほとんどすべてを奪われた。

男はさらに、配下の消防手を引き連れて、宗次郎の留守中に家に押しかけ、戸や障子、家具を手当たり次第に壊してひきあげていったこともある。警察は見てみぬふりだった。

また同じキリスト教のなかでも、違う宗派からの攻撃もあった。斎藤の無教会信仰を、墮落したキリスト教徒として非難するだけでなく、師の鑑三と離反させようという動きもあった。

■□■

明治四十一年十一月四日、長女の愛子が腹痛を訴え、急性腹膜炎と診断された。前日の天長節祝賀式典で、「ヤソの子」と悪口をあびせた男子児童から腹部を強く打たれたためだった。

宗次郎は、幼いころから愛子に何度も聖書を読んでやり、ともに祈り、信仰に導いていた。愛子は父の思いに応えただけでなく、小学校の成績も抜群だったという。

宗次郎は温泉療法に連れて行ったり、自ら食事を用意して回復に努めたが、翌年四月、八年という短い生涯を終えた。

宗次郎は晩年になって、花巻での苦難の日々を語ったとき、特に愛子の死のくだりでは、目に涙を光らせ、声を震わせていたという。

その間、宗次郎の新聞配達の仕事は休むことなく続けられた。当時、新聞は鉄道で輸送されてきた。毎朝三時に起き、多くの種類を取り扱っていたため、三回も四回も花巻駅まで新聞を取りに行った。

そして、宗次郎の『二荊（けい）自叙伝』によれば、頭には鑑三から贈られた烏打ち帽子をかぶり、ねずみ色のシャツ二枚にチョッキ姿、紺の足袋に脚半をつけ、わらじをはき、手には軍手をはめて、駆け足で配達して回った。

朝刊がすむとすぐ夕刊の配達があった。午後九時ごろまで仕事をして、さらに読書をし、日記をつけるという毎日だった。その合間に畑仕事をこなし、神に祈った。

配達途中で、子供や貧しい人に菓子を与え、病人を見舞う宗次郎の姿が、宮沢賢治の『雨ニモマケズ』のモデルになった、との説があることはすでに述べた。

その説の真偽はともかく、宗次郎は雨の日も、風の日も雪の日も新聞を届けたのはもちろん、新聞の到着が遅れるときには、一軒一軒に予告して回るほどだった。

顧客の評判は上がり、取り次ぎ部数は少しずつ増えていった。やがてライバル店を圧倒するようになり、その仕事ぶりは東京の新聞業界にも知れわたるようになる。

■□■

愛（まな）娘の死から三年後には、病弱だった妻のスエも二十九歳で病死する。

宗次郎の孫娘の夫、山本泰次郎によれば、宗次郎の家に、約四百人が香典を持参し、お悔やみの手紙は六十通をこえた。

そしてこうつづる。

《キリスト教に対する迫害はほとんど影をひそめてしまったばかりか、むしろ深い尊敬と同情とを示すに至った》（『内村鑑三とひとりの弟子』）

宗次郎の家族の相次ぐ不幸を境に唐突に迫害がやんだような印象をうける。

孫の児玉佳興子は「同情もあったでしょうが、それ以上に祖父の行ってきた善行や、誠実な仕事ぶりが徐々に評価されていったことが大きいのではないですか」という。

さらに、佳興子は、スエの死の一年後に嫁いできた仁志（ひとし）の円満な人柄も大きかったと指摘する。

ともかく宗次郎は人々から「斎藤先生」と呼ばれるようになり、「名物買うなら花巻おこし 新聞買うなら斎藤先生」といわれるまでになる。

親交のあった画家の中村不折からは「花巻のトルストイ」とまで祭り上げられた。

少年時代、宗次郎の自宅近くに住み、のちに岩手放送会長を務めた太田俊穂は宗次郎の印象をタウン紙にこのようにつづっている。

《頭は禿（は）げていたが黒々としたアゴ髭を生やし、夏など真っ白なワイシャツ姿で「お早よう」とあいさつをし

『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（3）.txt

て新聞を玄関に投げ込んで行く。その声は朗々たるものであった…一種の清潔感があって子供心になんとも偉い人のように思えた》

＝敬称略

（佐竹一秀）

【写真説明】

2人の娘と宗次郎。抱かれているのが愛子。愛子が8歳で永眠する直前に撮影されたもの  
神に祈りをささげる宗次郎。川辺や木陰など祈りの場所を見つけては熱心に祈った  
明治41年晩秋、自宅の庭で農作業をする宗次郎。縁側に妻のスエと思われる女性の姿がみえる

【凜として】（２１１）『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（４）上京 [2005年03月10日 東京朝刊]

【凜として】（２１１）『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（４）上京  
[2005年03月10日 東京朝刊]

■「若き兄妹の永訣の朝堪えられぬ感に入る」賢治との美しい交流

■布教と文学…友と永遠の別れ

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ

みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ…

日本女子大を卒業後、母校の花巻高女の教師をしていた宮沢賢治の妹、トシが、大正十一（一九二二）年十一月、二十四歳で病死した。

賢治の衝撃は大きかったが、あくまで詩人であった。トシの亡くなった日、三つの追悼の詩を書いている。そのうちのひとつが、死にゆくトシへの呼びかけで始まる『永訣の朝』である。

これはのちに詩集『春と修羅』（第一集）に納められ、大正十三年に自費出版された。

斎藤宗次郎が日記をもとに残した『二荊自叙伝』のなかには、その年の二月七日、草稿を見せられる場面がある。

この日、宗次郎は午後、賢治が勤務していた花巻農学校に新聞代金を受け取りに行き、たまたま宿直番だった賢治と暖炉を囲んで話し込んだ。

この日の話題の中心は、賢治が編集中心だった詩集のことだった。賢治は、詩集の校正刷のページを開いて、「これは私の妹の死の日を詠んだもの」と宗次郎のひざの上に置いた。

《アゝ 死の日を詠んだものか

予は心臓の奥の轟きを覚えた》

■□■

感動の余りか、宗次郎の自叙伝の文体が急に詩のようになっている。

《何を休めても見ましようとして手に執れば

あの頃の彼女を想像せる姿

校門に進む若き女教師としての姿

慰安を慕う彼女の心

癒えんものなら癒ゆる様にと酸素を吸入する面影》

おそらく宗次郎は、トシとも面識があったのだろう。自分がかつて試し結核を治癒させた「化合酸素」吸入療法という治療法を宮沢家に紹介。一時トシの病状が回復して感謝されたこともあった。

《若き兄妹の永訣の朝の真情濃かなる場面に

我と我身を投じて堪えられぬ感に入った》

宗次郎の胸を震わせたのは、賢治の詩のできればだけではないだろう。自分もまた娘と妻を相次いで亡くした経験をしたこと、賢治の喪失感をわがこのように受け止めたのではないだろうか。

■□■

宗次郎と賢治は十九と親子ほどの年の差があった。賢治の父、政次郎（まさじろう）は質屋や古着屋を営む富裕な商人で、宗次郎は常々「見識高き一人」と尊敬していた。

路上で会ったときも、日本の教育の腐敗や米国の将来などを語り合う仲だった。

また宗次郎の教諭時代の同僚で、同じキリスト教徒だった親友の照井真臣乳（まみち）が、小学校のころの賢治の担任をしていたという縁もある。

宗次郎は賢治を幼いころから知っていたのかもしれない。

■□■

しかし、二人の交流が深まるのは、賢治が花巻農学校に教諭として赴任してからだった。

『二荊自叙伝』には、大正十年ごろから賢治の名がしばしば登場するようになる。

《大正十一年二月三日 宮沢賢治、白藤、奥寺の諸氏居合せストーブを囲んで色々の話をなす》

《大正十二年六月三日 農学校にて宮沢賢治先生と物語った、始めに苺（いちご）、甘藍（かんらん）（キャベツ）、蕃茄（ばんか）（トマト）などの話があった》

《大正十二年九月十二日

（宮沢賢治）氏は予を歓待して呉れた、椅子を取出して予をして之に倚（よ）らしめた。更に蓄音器によってピアノの数曲を予に供したのであった》

二人はしばしば農業について情報交換し、またともにベーターベンのファンで、賢治が中心になって開いたコンサートに招かれたことについてはすでに述べた。

しかし、二人の間で趣味があわなかったこともある。それは演劇。賢治は教育の一環として、生徒たちに自作の劇を上演させていたのに対し、宗次郎は教諭時代から演劇や活動写真が嫌い、生徒にも禁止していた。

自分が経営する書店の従業員の帰りが遅い日があり、活動写真を見ていると察すると、帰ってきた従業員を家に入れなかったこともあったほどだ。

宗次郎の孫の児玉佳與子はこんな回想をする。

「祖父は自然や本物を愛した人で、演劇のような作り物は人格を低下させると思っていたようです。私も子供のころは、祖父に内緒でこっそり父が映画や芝居に連れていってくれました」

その演劇嫌いの宗次郎も、賢治の招待とあらば出かけざるを得なかった。礼儀として十分間ほど客席にとどまればと思っていた宗次郎だったが、賢治の田園劇なる試みに少しは心ひかれるものがあったようだ。

大正十三年八月十一日にこんな感想を残している。

《微塵の艶めかしさはなく天真素朴なる構想に感じた、恐らくは天下独歩の企てゝあろう、氏の農村改革の一端と見ることが出来る》

賢治の法華経、宗次郎のキリスト教と信仰する宗教の違いは、二人の親交のなんの妨げにもならなかった。

孫の山本黎子はこう話す。

「祖母はよく賢治さんの話をしてくれました。賢治さんは、朝からお題目を唱えながらうち太鼓を叩いて町中歩いていたそうです。それを見て他の人は変人扱いしたそうですが、祖父は『賢治さんは偉い。あんなに一生懸命信仰するなんて』と話したそうです」

■□■

大正十五年九月三日、四十九歳になっていた宗次郎と妻の仁志は、故郷の花巻を去り、上京することになった。東京

『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（4）.txt

に住む娘夫婦が呼び寄せたことと、宗次郎が師である内村鑑三の傍らで仕えるためだった。

上京後、宗次郎が最初に受け取った手紙は賢治からのものだった。九月六日付で、《宮沢賢治氏から別るゝ時の感じを報じ来た同氏の心を思うて涙なきを得なかった》と書いた。

同じ年、賢治もまた農学校をやめ、文学活動とともに、地元の青年への農業指導を始める。二人が顔をあわせる機会はもうなかった。＝敬称略（佐竹一秀）

【写真説明】

花巻農学校の前に立つ賢治（右から3人目）＝岩手県立花巻農業高等学校提供

配達姿で経営する書店「求康堂」前に立つ宗次郎。雨の日も、風の日も、雪の日も花巻の町を駆け巡った

賢治が勤務していた当時の花巻農学校職員室。宗次郎は配達や集金で訪問するのを楽しみにしていた（右から3人目が賢治）（C）林風舎

■「これまでの私の人生は、すべてこのためにあった」…内村鑑三全集の任を全う

■最後まで付き従う人間関係

大正十五（一九二六）年から、東京・杉並区内で娘夫婦一家と同居生活を始めた斎藤宗次郎の毎日は、静かなものだった。

孫の山本黎（れい）子は「朝、まだ私たちが寝ているときからふき掃除をしていて『おはよう』と声をかけてくれる。それで目を覚ましていました」と回想する。

宗次郎の仕事といえば、大好きな畑仕事と師である内村鑑三の伝道を手伝うことだけだった。もっとも、いずれの仕事にも、真剣に向かい合う姿勢はあいかわらずだった。

家の周囲の十アールほどの畑には、柿、梅、びわの木を植え、トマト、イチゴ、落花生などを栽培した。

黎子の夫の奏次郎は宗次郎の仕事ぶりをこんなふうに伝えている。

《くわをふるいつつ、幾度かたたずんで神の恵みを感謝し、苗を植え、雑草を抜き、害虫と戦い、肥を施し、実を刈りつつ、手を休めては妙なる神の摂理をたたえ、神の愛を歌いつつ、絶え間なく祈り続けた》

《畑には一本の雑草もなく、土はなめたようにきれいに耕され、見る者を思わず、感嘆させた》（『内村鑑三とひとりの弟子』）

畑でとれた野菜や果物の一番でいいものはもちろん鑑三の所に届けられた。

一方、鑑三のもとでは雑誌の発送作業を手伝ったり、地方伝道に従ったり、鑑三の代理で出張することもあった。

《白いひげをなひかせつつ、つぶらな目を輝かせつつ、全身に喜びと感謝とをたたえつつ、黙々として、まめまめしく立ち働く斎藤は、すべての会衆の目を奪った》

■□■

昭和五年三月二十八日、内村鑑三は六十九歳で世を去った。病状が重くなってから、宗次郎は連日内村家に詰めて看護に当たり、臨終の際は、数分ごとの呼吸数まで数えて記録していた。

同じ年に岩波書店から『内村鑑三全集』が出版されることが決まった。宗次郎は、最初は実務委員、そして後に編集委員の一人として名を連ね、八年に全二十巻が完了するまで任を全うした。

収集癖のあった宗次郎は、新聞取次店をしていたころから、新聞に掲載された鑑三の論文を保存しており、それらを提供した。そして大学図書館や、新聞社、個人宅などを訪れては、膨大な資料を集め、それらすべてを一枚一枚台紙に張り付けて、原稿を作っていた。

孫の児玉加與子は当時の宗次郎の様子をこう語る。

「祖父は全集の編集委員になったとき『これまでの私の人生は、すべてこのためにあった』と感激していました。そして文字通り寝食を忘れて取り組み、いつの間にか明け方になり、内村家に泊まり込むこともありました」

■□■

全集の編集を終えた宗次郎が次に取り組んだのが病院伝道と著述活動だった。

主として、結核療養所や、ハンセン病療養所を訪問し、自身の結核からの生還の体験を語っては「あなたたちには、祈りの時間が与えられているのです。祈りによって救いを求めましょう」などと布教に努めた。

宗次郎の著述活動とは、すなわち鑑三がいかに偉大な人物であるか、そして自分がいかに導かれていったのかということをつづることだった。

『或る日の内村鑑三先生』『花巻非戦論事件における内村鑑三先生の教訓』『恩師言』などを完成させた後、とりかかったのが、『二荊自叙伝』だった。

昭和三十四年のことで、宗次郎は八十二歳になっていた。二十一歳から毎日つけていた日記が元になり、それ以前の出来事は記憶に頼って書き続けられた。

孫の田村眞生子はいう。

「自叙伝を書いているときの祖父はすごく生き生きして、時には涙ぐんでいることもありました。きっと、そのときのことを思い出していたのでしょう。食事のときに、きょうはこんなことを書いた、と話してくれながら目を潤ませることもありました」

死の直前まで書き続け、結局、六十一歳で迎えたクリスマスの行事で筆が止まったが、二万百ページ余、全四十巻の大作となった。

二十五日に上巻、六月に下巻が岩波書店から出版されるのは、このうち大正十年から十五年までの部分で、宮沢賢治との交流もつづられている。

いまなお根強い賢治の人気に「便乗」しながらも、一般には無名の人物である宗次郎の生涯を世に問うことにどんな意味があるのだろうか。

出版化の“仕掛け人”となった国際日本文化研究センター所長の山折哲雄は「人間の関係はどうあるべきか。何が本当の人間関係なのか。宗次郎の生き方には、今の日本の社会に欠けたものがある」と話す。

宗次郎にとってもっとも重要な人間関係とは、鑑三との師弟関係にほかならない。鑑三は思想家として数多くの宗教家や芸術家に影響を与えたが、その一方で、「誤解人物」と呼ばれるほど複雑な性格から、去っていた弟子も多かった。そのなかで最後まで鑑三に付き従う宗次郎の姿に山折は注目する。

「いまの日本の教育の欠点は横並びの平等意識。水平の人間関係は非常に不安定だ。横並びの水平軸に対して、師弟関係という垂直軸を立体的に交差させる。そういう教育システムを復活させなければならない。そのことを教えてくれるのが、鑑三と宗次郎の関係だ」

さらに山折によれば、宗次郎は宮沢賢治との関係では、師の立場になる。つまり「師と弟子の二重を生きた宗次郎の人生はますます魅力に富んでいる」というのだ。

■□■

宗次郎は自叙伝執筆と並行して、日記もつけていたが、四十二年十二月五日「もう、書くことがない」と筆を置き、まもなく病の床についた。

そして翌年の一月二日、九十歳で眠るように息を引き取った。

その前日、年賀のあいさつにきた親戚にこんな言葉を残している。

「私は神様の御許へ行くから、あとからみんなぞろぞろついて来い」＝敬称略

（おわり）

（佐竹一秀）

『雨ニモマケズ』のモデル？斎藤宗次郎（5）.txt

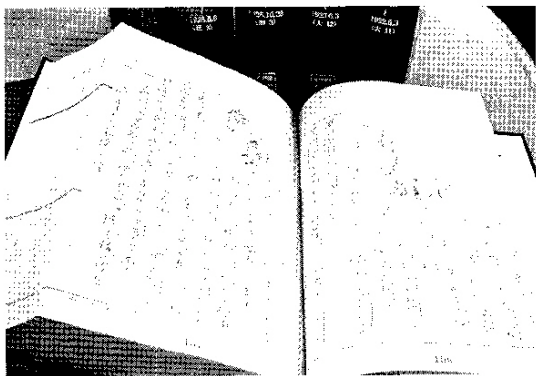
◇  
次回はリクルート事件の際、自民党の後継総裁への就任を要請されながらも固辞したことで知られる政治家、伊東正義です。

【写真説明】

最晩年の宗次郎。苦難に満ちた前半生と比べると後半生は穏やかなものだった

『二荊自叙伝』執筆中の宗次郎。時折、涙ぐんだりしながら数奇な人生を振り返っていた  
宗次郎が残した『二荊自叙伝』2万100ページ余、全40巻。すべて手書きで絵も添えられている

『二荊自叙伝』執筆中の宗次郎。時折、涙ぐんだりしながら  
数奇な人生を振り返っていた



宗次郎が残した『二荊自叙伝』2  
万100ページ余、全40巻。すべ  
て手書きで絵も添えられている